

(3)母性内科

概要、特色

母性内科は一般になじみの薄い診療科名であり、この一年は当科がどのような診療科であるのかを理解していただくためのものだったように思われる。主な仕事は合併症妊娠・妊娠合併症の内科的管理であるが、成育医療のセンターである当院の母性内科に求められている大きな役割として、小児期発症の疾患を成人期まで持ち越す患者、すなわちキャリアオーバー患者の母性的ケアがあげられる。具体的に言うと小さい頃に行った外科手術が妊娠・出産に支障を与えないか、投与された薬によって生殖能力に問題はないかなどを考え妊娠・出産に向けて内科的サポートをしていくことである。もちろん、妊娠・出産にすぐには結びつかない場合においても今までの主治医の医師と連携して母性内科の立場に立った内科的サポートをしていくことも重要であり「キャリアオーバー母性外来」として診療を行っている。

一方、発症年齢に関係なく病気をもつ女性が妊娠する場合の内科的ケア、すなわち合併症妊娠の管理も重要な業務である。若年女性に好発する甲状腺疾患・膠原病などの自己免疫疾患、慢性腎炎、若年性高血圧症などは病気が妊娠経過・胎児発育に大きな影響をおよぼすことがあり、また妊娠・分娩がきっかけで母体の病気が悪化することもある。さらに妊娠中毒症のような合併症（妊娠合併症）が出てくると、胎児の発育に大きな影響がでる。このように「母親と子ども」を健やかな状態に保持するために合併症妊娠・妊娠合併症の管理が大変重要である。

母性内科単独で完結する症例はほとんどなく、合併症妊娠は産科・不育診療科・新生児科、非妊娠時には婦人科や不妊診療科などとの連携が必要となる。また、こころの診療部が関与する症例も決して少なくない。キャリアオーバー患者においてはもちろん主治医である第一・第二専門診療部からの紹介・サポートがなければ始まらない。このようにいろいろな科の医師、コメディカルと連携して総合的な診療を展開している。

診療活動

(a)外来

月曜日から金曜日まで毎日行っている（月曜日は午後、火・水・木曜日は午前、金曜日は午前・午後）

平成14年4月1日より15年3月31日までの外来患者の総数は1865名であった。受診理由の主なものは合併症妊娠、妊娠合併症である。合併症妊娠のなかではバセドウ病が最も多く、次に気管支喘息であった。妊娠合併症のうち主なものは気管支炎、高血圧、不整脈、耐糖能異常、尿所見異常であった。一方、現在は妊娠していないが体調を整えてから妊娠に望みたいという女性に対しても内科的診療を行っている。高血圧症、糖尿病など生活習慣病のある女性、関節リウマチなどの自己免疫疾患を持つ女性をはじめ健康上の様々な不安を持つ女性が利用している。

(b)病棟

平成14年4月1日から15年3月31日までの入院日総数は1017名であった。入院患者の主な疾患は全身性エリテマトーデス、シェーグレン症候群、抗リン脂質抗体症候群、糖尿病、慢性腎不全、高血圧症であった。産科入院の症例についても内科的問題をもつ場合には併診という形をとっているため実際はこの数字よりはるかに多くの症例の診療にあたっていたことになる。また、抗リン脂質抗体症候群の患者については不育診療科と合同で診療を行っている。

(c)キャリアオーバーの妊娠症例

平成14年4月1日から15年3月31日までのキャリアオーバー患者の分娩は13例である。主なものは先天性心疾患術後5例、先天性胆道閉鎖症2例、先天性凝固異常2例である。小児期からの主治医、産科医とともに併診という形で診療している。